

# 教 仏 名 聞

第31号  
(発行日)

2013年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## お念仏に導かれて②

(比叡山で四十三歳の時、本願を信じ念仏申す身になられた)

法然聖人は比叡ひえいの山を下りられ

まして、吉水、現在の知恩院辺

りて念仏一つをお勧め下さいま

した。どんな人にも南無阿弥陀

仏をお勧め下さった。阿弥陀様

が「ただ称えるばかりで浄土に

生まれさせる」「どんなに罪が深

いものも念仏申すものを助ける」

と仰せ下さっているから、ただ

念仏して弥陀に助けていただき

ましょうぞと、お念仏をお勧め

下さった。

そしたら、たくさんの方が、

念仏申すようになったわけです。

その中で、親鸞聖人もお弟子と

なられた。聖人は二十九歳の時

に、比叡山ひえいざんの二十年間の修行を

離れ、比叡山ではどのような行

をしてみても心が開けないとい

うことで、比叡山を下り、法然

聖人の元に行かれて、念仏往生

の誓いを信じ、念仏申す身とな

られたわけでございます。

私も真宗の本を読みまして、

「我が名をただ称えるばかりで、

浄土に生まれさせる、助ける」

というご本願、そこに感銘しま

した。それは金子大栄先生のご

本がきっかけでしたけれども直

接的に私が教えていただいたの

は、佐々木蓮磨という先生でし

た。佐々木先生は「その

まま念仏してこい、汝の責任は

すべて引き受ける」これが弥陀

の本願である。阿弥陀様は「我

が名を称えよ、すべての責任は

弥陀が受けとる」と仰せ下さっ

ている。だから、「この本願にし

たがって念仏申していけ」「一

いと、ずばりこうおっしゃって

いました。あれだけずばりおっ

しやる先生というのは、めった

にお会いすることができなかつ

たですね。

その当時、私はモヤモヤして

色々な責任を感じて「責任

煩惱といいますが、あんならな

いといけない、こうならないと

いけないと思っ困っていたの

が「阿弥陀様は「ただ称え

るばかりでよい」「お前の責任は

すべてこの弥陀が受け持つから

心配せんでもいい、そのまま念

仏してこい」と仰せ下さる。こ

とで、多くの人が念仏申す身と

なられたように。

ところが、その次の問題がや

っぱりでてくるわけです。

これは、『浄土論註』の言葉で

すが、聖人が『教行証文類』の

信巻に引用されています、そこ

に、

しかるに称名憶念あれども、

無明なお存して所願を満てざ

るはいかんとらば、実のご

とく修行せざると、名義と相

応せざるに由るがゆえなり。

と。称名憶念というのは、称名

念仏。称えておっても、なお無

明があつて、自分の心の一番底

の願いが満足できない。念仏は

申しておるのだけれども、落着

けない。満足できない。そうい

うことがあるのですね。

それは、お念仏のいわれとピタ

ツと合わないからだと、こうい

う意味の内容なのです。

確かに行というのは、すぐに

つかめるのですね。つかめると

いうことは、やっぱり大事だと

思います。例えば、浄土真宗で

は、本願を信じ念仏申せば仏に

なる教えです。お念仏が大事で

あり、信心が大事であると、こ

う申します。しかし、すぐに「あ

ーわかりました」と信心をすぐ

にいただけるかといいますが、

中々難しいです。信心は。極

難信といわれているように、す

ぐに本願を信ずるということは、

中々起こりがたいですね。信心

は口すっぱく勧められるけれど

も、信心をいただくということ

は現実的には簡単にはいかない

ですね。

ところが、口で念仏申すとい

うことは、誰でもいつでもどこ

でもできるわけです。これはた

やすく行ずることが出来るわけ

です。だから、ここから真宗の

道がつくと思えます。阿弥陀様

が法蔵菩薩となつて、南無阿弥

陀仏で一切衆生を救おうと、お

念仏でもって救おうとされた一

つの意味は、私たちがとにかく

阿弥陀様とどこかで縁が結ばれ

てくる最初のきっかけは、お経

を読んだからとか信心の話を開

いたからというよりもやはり念

仏という、ともかくも阿弥陀の

名を称えるということですね。

それはきっかけとして非常につ

かみやすいです。ですから、い

つてみれば阿弥陀様は、南無阿

弥陀仏をつかませて、つかませ

て南無阿弥陀仏のお心を知らせて下さる。まずつかむというところが大事なことであろうと思います。

それで次に、お念仏は申しているのだけれどもどうも心に満足ができない。やっぱり、苦しみ、うっとうしいものがとれない、こういう問題になってくるのです。これで随分長いこと悶々としておりました。これは、法然聖人の時代でいうと、

法然聖人がお勧めくださって、多くの人が念仏申したけれども、所願が満たされないというのは、どういふことかと、このところに信心の問題が出てくるわけです。念仏は申しておるけれども、そこに信心がいただけていない。本願をまだ本心に信じていない。

本願を信じているか、本願を疑っているかという、このところを非常に明確におさえて、疑いを離れさせ、疑いをこえて本心の信心へと導こうとされたのが、親鸞聖人の大きなお仕事だったと思います。

『無量寿経』に第十九願というのがあります、  
たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、心を至し願を発して我が国に生まれんと欲わん。寿終る時に臨ん

で、たとい大衆と圍繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

そして、その後二十願というのがあります。  
たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。

この『無量寿経』の第十九願というのは、いつてみれば比叡山あたりで、浄土に生まれる行としてはお念仏だけではなくて、戒律を守ったり、経典を読んだり、あるいは止観の行をしたり、さまざまな修行によって浄土に生まれようと、こういうような

立場。比叡山（天台宗）の浄土教の立場というのは、そういう立場で、法然聖人も親鸞聖人も比叡山ではそういう姿で仏法を求めておられたわけです。現在の天台宗でもこれは同じでしょう。

私も六、七年程前に台湾に行きまして、高雄というところがあります、そこに仏光山という大きなお寺があります。台湾は今仏教が盛んなのです。中国で文化大革命がおこって、

優秀なお坊さんが中国を離れて、香港、台湾、シンガポールなどに移って行って、そこで教化活動を熱心にして、そして二十年ぐらい経つたら効果が現れてきて、台湾の仏教徒は始め四百万ぐらいだったのが、今は八百万人ぐらいになってきました。この前の東北の震災で、海外からは一番に駆けつけてきたのは、台湾の仏教ボランティアの人たちです。これは、証厳法師という尼僧さんが、仏教ボランティア団体を立ち上げて、世界で四百万人ぐらいの会員があるそうです。その人たちがこの間の震災の時も駆けつけて、すごく活動されたということがございます。

仏光山は大きなお寺です。ここに泊めていただいて、夕方お勤めに参加しました。お坊さんが四百人ぐらい、その中に尼僧さんが、それも三十代ぐらいの尼僧さんが百人ぐらいいました。また、在家の信者さんが、百人ぐらい、みんな一緒に勤行をします。これは、普通の日ですよ。尼僧さんに若い人が多いのにびっくりしました。日本の尼僧さんといえば、大抵お年寄りですね。それも最近はめつたに見ませぬ。向こうは学歴の高い尼僧さんも多いのです。昔は、

中国で尼僧さんといえば、学歴のあまりない、生活にいきくれた人が尼僧さんになられていたそうです。ところが今は、高学歴の人で、自分は仏教の勉強をして、仏教に生きていきたいという人が次々と出てきています。そんな中でお勤めをしたわけです。最初は、『阿弥陀経』を読むのです。一応ついていきます。漢音ですけれども。その後、本堂の前に大きな広場がありまして、そこに一列になりまして、

ずーっと行道念仏です。念仏を称えるわけです。「ナモオミトフア」といって、称えるわけです。だから、向こうの人たちも南無阿弥陀仏と念仏をしているわけです。それは確かに念仏です。浄土に生まれる行なので、すけれども、それは天台宗などで称えている念仏と同じで、他の色々な行の一つとして、修行としてされる念仏です。それが、十九願の姿です。

法然聖人も親鸞聖人もそれには行き詰られて、これではとても駄目であると、いつまでたっても心が開けないということ、この十九願の立場を離れて、法然聖人はそれ以後は念仏一つ、これは「専修念仏」です。往生の行は専ら念仏一行を称える。他の行を必要としない。ただ念

仏を称える一つである。阿弥陀仏は、「阿弥陀仏のみ名を称えるばかりで、浄土に生まれさせる」と誓って下さっている。念仏往生の誓いを建てて、その通りにはたらい下さっている。だから、念仏一つで助かるのだ。ということ。それを多くの人は、惹かれましてお念仏を申すようになるわけですが、今度はその次の二十願です。

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。

念仏は称えていますけれども、念仏のお心へ我が名を称えるばかりで助ける〜とまで仰せくださる広大な大悲、それが、まだ受け取られていない。そこを受け取らずにややもすると「称えておれ、亡くなる時に阿弥陀様がお迎えに来て下さるか、称えておればいつかは助けて下さる、一生懸命称えておればいつかは信心が得られるだろうと。称えることよって未来に「救い」を得ようとする。そ

に「救い」を得ようとする。そ

ういう問題に行き着くのです。そういうことになりやすいのです。だから、そのところを二十願では、「もろもろの徳本を植えて」と、植えるようにして念仏を称える。徳本というのは念仏のことです。名号です。名号を植えるようにして称えるということは、ちょうど田んぼに苗を植えるように。田んぼに苗を植えるのは、何のためかという、秋にお米を収穫するためでしょう。植えるために、植えているのではないのです。植えるのは、秋にお米を穫りたいから植えるわけです。だから、一つずつ植えて、これだけ植えておけば、秋になったらお米が穫れると思って植えているわけです。そのように南無阿弥陀仏と称えていけば、いつかはお助け下さる、称えることによつていつかは阿弥陀様は「よく称えた」といつて、ご褒美に浄土に生まれさせてやろうと。いわゆる自分の救いか浄土に生まれることの手段として念仏を行ずる。こういう姿になりがちなのです。

実際に真宗の教えを聞いて、念仏申していても、念仏しておればいつかは信心を得られるだろうと、いつかは阿弥陀様に会えるだろうと。称えることをバネとして、それを因として、

功德を得よう、救いを得ようと、こういうことが起こるのです。そういう立場から中々出れないです。そういうことは、長いこと続くうるわけです。

法然聖人の元でお念仏を申す方が非常に増えた、それは結構だけれども念仏の心、いわゆる本願の本当のお心をいただいていない。そういう人たちが多い。親鸞聖人はそういうところに問題があるということをはっきりと、そこを明らかにされたわけです。

江戸時代の終わりに妙好人という非常に信心の篤い方が沢山出られた、その一人で香川県に庄松さんという方が出られた。その庄松さんの言葉に「剣じゃ、剣じゃといって、大抵の者は鞘をつかんでおる」と。外側の鞘をつかんで中（剣）をつかんでいない。南無阿弥陀仏はつかんでいるのだけれども、いわゆる称えているのだけれども、南無阿弥陀仏にこもっているところの「丸々助けてやる」という大いなる慈悲をいただいている。そこで、往生一定といえますか、救いが決定しない。そこをはっきりとお示し下さったのが、親鸞聖人でございます。

教えを聞くということ、光明を聞くということ、「光明名号頭因縁」（正信偈）という

言葉がございます。これは善導大師がおっしゃった。これを聖人は、光明と名号は、因となり縁となつて信心ということが起こるのだということをおっしゃっているわけです。

光明というのは心を照らす光です。親鸞聖人は光というのは、〈経〉という。〈光仏〉という言葉に聖人は註釈をつけて、「経也」とおっしゃっているところがあつた。光のほたらきとは何かといった時に〈経〉である。

ね。仏様の言葉は光なのだ。仏の光といえますとどこかまでびかつと光つていっているような話ではなくて、仏様の光というのは、仏の言葉となつて私に教えて下さっている。お釈迦様の言葉は光となつて私の心を照らし、人生を照らす。何が真実であるかを照らすような言葉であるから光だと。仏の言葉はたくさんあるのだけれども、『大無量寿経』の言葉、いわゆる本願の言葉が、私どもにとつては具体的な救いの光だといふ。

ですから光明に会うということとは仏の言葉を聞くということ。いわゆる仏法聴聞です。本願のいわれをよくよく聞く。本願のいわれというのは、南無阿弥陀仏のいわれですから、い

わゆる光明というのは、南無阿弥陀仏というお名号のいわれですね。

それが光明、そしてもう一つは名号ということ。名号とはお念仏。お念仏を称える。お念仏を称えつつお念仏のいわれを聞くこと。これを繰り返す。私のお会いしました佐々木蓮鷹という先生は、私が大谷大学に入った時にちょうど総会所とあって東本願寺の前に説教所があります、そこにお説教に来ておられます、その時はじめてお会いしました。お説教が終わりましたら、先生のおられる部屋に行きまして、二時間ぐらいい先生と膝つき合わせて聞かせていただきました。印象の深いことは「あなたは学問的に真宗を学ぶよりも求道的に学びなさい」と言われました。いわゆる自分の救いを求めて学びなさい。単に学問的に真宗を学ぶのではなしに、ということをまずいわれて、それから「称えつつ聞き、聞きつつ称えなさい」ということをよくいわれました。いわゆる、念仏を称えつつ本願の思召しを聞く。阿弥陀様のお心を聞く。阿弥陀様のお心を聞きつつ、お念仏を申すという、いわゆる行というものをしなさいと。単に教えを聞く、単に仏法聴聞し

ているだけではなくて、念仏を称えつつ念仏のいわれを聞く、それが、いわば「光明・名号の因縁」です。

ただ、聞いただけでは。例えばどこかのお寺でお話を聞く。先生のお話を聞く。帰りまして、しばらくしたらもう忘れていまして。皆さんどうですか？いい話だとその時は思つても、帰つてしばらくすると、もうなんという話だったのか、つかめないですね、中々。聞いた時は「ああ、よかつた」と思つても、しばらくしたらどつかへいっていません。

お念仏の中に、お念仏の内容（お心）が全部統合されています。ですから、〈南無阿弥陀仏〉と称えているお念仏において、具体的に弥陀のお心である仏法が身にしみてくるのではないかと思ひます。このお念仏を称え、そのいわれを聞く、それを繰り返すとどういうことになるのか、ということを私の経験から、これを次ぎに申し上げたいと思ひます。



網行灯 (C)SHOGAKUKAN INC.

(続く)

# 正信偈に学ぶ同答

(五十一)

開入本願大智海

行者正受金剛心

慶喜一念相應後

与韋提等獲三忍

即証法性之常樂

〔書き下し〕本願の大智海に開入すれば、行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲、すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

〔現代語訳〕「本願の大いなる智慧の海に入れば、行者は他力の信を回向され、如来の本願にかなうことができたそのときに、韋提希と同じく喜忍・悟忍・信忍の三忍を得て、浄土に往生してただちにさとりを開く」と述べられた。

\*

D 「次に（開入本願大智海）の句ですが、これは前の（光明名号頭因縁）を受けて、次ぎの（行者正受金剛心）へと続いて読むのがよいと思います。すなわち光明である本願のみ教えを聴聞し、名号を称える、それが因縁となつて、私たちを本願の大きな用きの中に入れて下さる、といわれているのですね」

N 「本願の大智海に開入させて下さるこのことですが、本願の大智海とは」

D 「阿弥陀仏が一切衆生を助けようとの本願の用きは慈悲の用きですが、そ

れは阿弥陀仏の大きいなる智慧から表れ出てきたといえましよう。一切衆生をどうしたら本當の

幸せ（涅槃）に至らしめることができるかを、大きいなる仏の智慧にて知り抜き、そして一切衆生を迷いの世界から悟りの世界へ至らしめる確かな道を私たちに、釈尊の説法として開き示して下さい。それが阿弥陀仏の智慧の用きが現実化した浄土の三部経の教法といえましよう。大きいなる智慧の海のような徳から私たちに開かれ示されてきたのです」

N 「阿弥陀仏の智慧の光明は釈尊の説法となつて、私たちに一切衆生が浄土に生まれて仏になる法を開示された、それが浄土の三部経なのです」

D 「ええ、そういう用きの全体が阿弥陀仏の大悲の智慧の用きですね。それが具体的に本願の念仏となつて、私たちに与えられた。それをいただいて称え、それを聞くことによつて、私たちは阿弥陀仏の智慧と慈悲の領域、ここでは（本願の大智海）に入らせていただくことができるのです」

N 「真理は阿弥陀仏の方から私たちに開き示して下さいね」

D 「ええそこが大事ですね。凡夫の私達の方から真理の扉を開くことは不可能なことといえましよう。しかし、真理の方から私達に開示して下さい。それによつて、阿弥陀仏の光が私のまっくらな心に入り、私達は阿弥陀仏のお徳に浴することができるのです」

N 「無量寿経の説法を聞き、お念仏を称え聞かせていただく。そこに私たちの閉鎖された心が開き、阿弥陀仏の光が入つて下さり、阿弥陀仏の光明に包まれるのです」

D 「阿弥陀様の光が入つて下さると、私たちの心が阿弥陀仏のみ言葉に心が開かれて、（仏のお言葉はまちがいない）と信受されます。阿弥陀仏のお言葉を受け入れることができるのです」

N 「阿弥陀仏のお力によつて、仏の言葉を受け入れ、阿弥陀仏の大悲のお心に私の心が開かれるのです」

D 「ええそうです。そして仏心に心が開かれてくると、今度は私たちの心が他者や社会・世界に開かれ始めます」

N 「他者に心が開かれるということは、どういふことですか」

D 「たとえ、人に対して自分を守るう、自分を立てよう、自分の評価を上げまい、などとたくみに自我の殻を作つて、その殻の中に自分の居場所を見つけようと計らつていた者が、他者に心が開かれ始めることによつて、自分を防衛する殻から解放されていくことが起こってきます。そして他者の幸せや不幸に関心が生まれ、人の助けになることへと促されていくようになっていく。もちろんぼつぼつですが」

N 「次の（行者、正しく金剛心を受けしめ）はどういう意味ですか」

D 「本願のお心が私の心を

開き、入つて下さると、それは金剛の如くなものにも壊されない信心として、念仏行者に受容されて、凡心と離れなくなるのです」

N 「金剛の如くというのは」

D 「金剛とは、金剛石と云えばダイヤモンドのことで、ダイヤモンドは硬くて壊れなく逆に他の物をこわす力がある。ここではいただいた信心は、どのような主義や思想や信仰、あるいは襲ってくる逆境にも、それによつて壊れることが無い。逆に間違つた考えや思想や信仰を克服するほどの力を持っている、という意味で信心を金剛心とも言います」

N 「信心が金剛心という徳をもつていふことは大事ですね。私達はどれほど他者の考えや社会の風潮やさまざまな信仰にふりまわされたり、あるいは自分の内心から起こる不安や懐疑や苦しきみよつて、自分自身を苦しみの淵に落とすとしてきたことか、痛いほど経験してきましたから。ではなぜ真宗の信心が金剛心なのでしょう」

D 「いただいた信心が、なぜ堅固で壊れない金剛心という徳をもつていふのか。私も不思議でして、その理由は私にも分かりません。ただ信心が真実心であるからとしかいえないませんが、不思議で有難いことです」

(続く)

## 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日（月）午後二時始

講師 藤枝宏壽師（福井県越前市）